

■活動記録

地域情報研究所における大学院生・若手研究者の活動

江成 穰

立命館大学政策科学研究科博士課程後期課程 3 回生 / 地域情報研究所所属院生

1. 自己紹介と本稿の目的

1.1. 本稿の目的

本稿の目的は、2020 年度に立命館大学政策科学研究科博士課程後期課程の学位論文を提出した筆者の研究活動の整理を通して、地域情報研究所における諸活動が大学院生や若手研究者の研究活動及びキャリア形成に、どの様に貢献するものであるかという点を明らかにすることです。

筆者の所属する政策科学研究科を含む社会科学系の博士後期課程では、研究科に所属する院生の数や受講する授業などが前期課程と比較して極端に減るため、研究活動がそれまで以上に個人単位で取り組むものとなる場合が多いです。結果として、日常的に議論し切磋琢磨することのできる相手が減少し、個人差はあれど概して研究活動のリズムを作ることが難しくなりがちです。

難しい状況に陥ることの多いドクターの生活ですが、私は幸いにも 3 年で博士論文を提出することができ、またアカデミックポストへの内定も得ることができました。本稿では、極めて個人的・個別的な体験談とはなりますが、私の地域情報研究所における研究活動を整理することで、将来の大学院生や若手研究者の参考としてもらうことを意図しています。また、所属院生の研究活動の実態を報告することで研究所運営に資する情報を提供することも意図しています。

1.2. 筆者の自己紹介

筆者は立命館大学政策科学部から大学院政策科学研究科博士課程前期課程、同後期課程へと進学しており、地域情報研究所には博士課程後期課程に進学した 2018 年 4 月から所属しています。所属当初から、日常的な研究活動は大学院の共同研究室ではなく地域情報研究所を拠点としており¹、日頃から研究所所属の先生方や研究員・院生の諸先輩方には自身の研究の相談をはじめ、多くの議論に付き合ってくださいました。また、博士課程前期課程在学中から地域情報研究所主催の国際シンポジウムでのポスター報告など、研究報告やディスカッションの機会を多くいただきました。

¹ 地域情報研究所の所属院生や研究員に対しては、毎年 5 月ごろに利用申請を行うことで各人専用の机と本棚が利用できるようになります。また、研究活動に必要な印刷環境や文房具、各種電子機器などはもちろん揃えられているため、大学院生や若手研究者が研究拠点とする際に不自由のないだけの機能が整っています。

なお私の専門は地域経済学及び地方財政論です。前期課程から後期課程の前半までは産業連関分析など地域経済の計量分析を中心とした研究を行い、後期課程の後半では産業政策に着目した事例研究を行いました。博士論文においては日本の地方自治体が地域経済発展において果たしうる役割について、内発的発展論をベースとしながら議論をしています。

1.3. 大学院生及び若手研究者の研究・キャリア形成上の課題

地域情報研究所での諸活動及び研究所機能の有用性や課題を検討する前に、大学院生や若手研究者が自身の研究活動を展開し、キャリアを形成していく上での諸課題についての私見を整理します。これはもちろん、不出来な私の経験をベースとしていますので、このような不安や困難をほとんど経験しない方も存在するかとは思いますが、全く別の悩みを抱えてしまう方も多くいらっしゃると思います。ただ、多くの院生・若手研究者が抱えるであろう悩みや不安について整理を行うことは、研究所活動の有用性や課題を明らかにする上で重要であると考え、一応の整理を行います。

博士課程後期課程に所属する大学院生にとっての最大の課題は、もちろん博士論文のための研究です。博士論文執筆のための研究は、当然としてそれまでの研究以上のレベルを求められるために多くの困難を伴います。具体的には、議論の新規性や学術的な貢献をいかに設定し生み出すかという点やより高次の問題にアプローチするための研究方法、論文執筆や研究報告の際の論理的一貫性などの課題に多くの院生が苦勞しているように思います。

また、将来のキャリアパスが不明確であるという点も大きな課題です。特に人文社会科学系では所属するゼミやリサーチ・プロジェクト、研究室などの研究活動の基盤となるコミュニティにモデルとなる後期課程や若手研究者の先輩がおらず、自身のキャリアパスをどのように描くべきかが分からなくなってしまうケースは多々あるかと思えます。

研究活動の発展とキャリア形成（アカデミックポストの獲得や専門性を生かした民間就職など）のためには、論文の執筆や学会報告を積極的に行い、研究業績を積み重ねることが当然として重要です。しかし、学会という特殊なコミュニティの新参者である大学院生は、そこでの研究報告などに高い心理的ハードルを感じてしまいがちです。研究展開のダイナミクスに関わるような話ではありませんが、この様な細かいハードルを越えていくことも充実した研究生活を送る上では重要であると考えます。

上記に加えて、授業や業務などの生活上の制約の少なさから生活リズムをついつい崩れてしまいがちであるという点も、継続的に充実した研究活動を展開する上での課題となります。さらに、生活リズムが崩れ、研究が進まず、将来のキャリアを見通すことが難しくなれば、研究に対するモチベーションの維持が困難になり、最終的に精神的な不調をきたしてしまうケースすらも見受けられます。研究が行き詰ってしまった際にも、このような負のスパイラルに陥る前に研究や生活を見直し、研究活動を充実化させていく必要があります。

以下では、私の地域情報研究所での研究活動・経験をベースに、地域情報研究所での研究活動がこれらの問題の解消にどのように/どの程度寄与しうるものかを検討します。

2. 地域情報研究所での研究活動

2.1. 研究活動の整理

表 1：地域情報研究所における研究活動一覧

年	月	活動内容	テーマなど
2017	2	国際シンポジウム・ポスター報告	The Relationship between Regional Economics and Local Government Finance
	7	国際シンポジウム・ポスター報告	The Possibility of Strategic Migration Policies in Rural Areas
	11	国際シンポジウム・ポスター報告	A Theory of Regional Input-Output Table: Issues in Non-Survey Method
2018	3	北九州市・福岡市実地調査	公共施設マネジメントの実態
	7~	英語論文サポートプログラム参加	Relations between Public Finance and Regional Economy in Japan
	9	大和市・武蔵野市・多摩市実地調査	公共施設の複合化と統廃合
	11	研究報告会・口頭報告	都道府県経済の財政依存構造—47 都道府県産業連関表の分析を基にして—
2019	2	国際シンポジウム・ポスター報告	Importance of “Ambiguity” on Public Facilities
	3	国内シンポジウム・ポスター報告	公共施設マネジメントにおける住民参加の意義と観点—事例比較検討を中心に—
	3	ディスカッションペーパー公表	公共施設マネジメントの課題と展望—北九州市・福岡市を素材として—
	5	いばらきX立命館DAY企画・運営	“ワールドカフェ”を体験しよう！
	6	企画報告書執筆	“ワールドカフェ”を体験しよう！ 実施報告書
	7~	英語論文サポートプログラム参加	Challenges Facing Regional Industrial Policy for a Traditional Japanese City
	11	研究報告会・口頭報告	The Theoretical Basis and Reality of Regional Industrial Policy
2020	2	国際シンポジウム・ポスター報告	Regional Industrial Policy on Aged Society
	2	国際シンポジウム・ポスター報告	Aging of Japanese Society and Social Capital
	11	国際シンポジウム・口頭報告	Altruism on Regional Economy: A Case Study on Iida City, Nagano Prefecture

出所：筆者作成

まず最初に、表 1 から私の地域情報研究所における活動を整理していきます。なお、この表は研究所の企画への参加や研究所予算を使わせていただいた実地調査などを中心にしたものであり、私の研究活動の全体を示したものではありません。

地域情報研究所での私の活動は、①自身の博士論文に関わるもの、②研究所において他の若手研究者と設定した研究テーマに関わるもの、③研究所全体の活動に関わるものという 3 種類におおよそ分類可能です。

①については、国際シンポジウムでの英語報告を中心に多くの報告機会をいただくことができました。またこれらの報告におけるフィードバック以上に、日頃の地域情報研究所における研究活動と、そこでの先生方や研究員の方々とのディスカッションが研究を進める助けとなりました。

また②については、2018 年 3 月の北九州市及び福岡市における公共施設マネジメントに関する実地調査を契機として公共施設マネジメントについての問題意識を深め、研究所所属の若手研究者を中心に研究会を結成して研究活動を展開しました。その成果はディスカッションペーパー1 本と 2 度のシンポジウム報告となっており、決して多くの研究成果を残すことができた訳ではありません。しかし、博士論文ばかりを考えてしまいがちな後期課程において、他の研究テーマを設定しそれに向けた研究プロジェクトを展開するという経験は、より広い視野を持つという点で自身の研究活動全体に大きな好影響を与えてくれました。

③の活動としては、各国際シンポジウムやイベントの企画・運営があげられます。これらの経験は自身の研究に直接的なフィードバックを与えてくれるようなものではありません。

んが、自身の実務経験を高めると共に就職活動の際に実務能力を示すための機会となっています。もちろん大学院生ですので研究を第一に考えるべきではありますが、社会人経験の乏しい私のような大学院生の場合、実務的な能力が十分に備わっていることを証明するためにも研究所などのイベントの企画運営に携わることは重要であると考えています。また、こういった機会を活かして普段あまり使わないコミュニケーション能力を高め、リサーチオフィスの職員さんなどとの良好な関係を構築することも研究生活において重要であると言えます。

2.2. 地域情報研究所における活動の特徴

以上の地域情報研究所における諸活動の整理に基づいて、この研究所の特徴とここを研究拠点とすることで得ることのできた機会などを確認していきます。第1に、共同研究や研究報告会などで所属する研究者同士の交流が図られやすい研究所は、他の院生の研究内容を把握する機会が少ない院生の共同研究室などよりも、他の研究者とのコミュニケーションが取りやすい環境です。自身の研究計画やフレームワークなどの基礎的な部分を含めて、研究の多くの部分をブラッシュアップしていかなければならない大学院生や若手研究者にとって、ディスカッションの機会は研究を進めていくために絶対的に重要です。他の研究者とコミュニケーションが比較的取りやすく、なおかつ若手研究者以外に先生方も出入りをする地域情報研究所は、より多くのディスカッションの機会を得ることができるという点で若手研究者の研究進展にとって良い環境であると言えます。

なお地域情報研究所は、サバティカルなどで海外の大学から立命館にいらっしゃる客員研究員などの受け入れも積極的に行っています。ほとんど毎年、1~2名ほど海外の大学に所属されている研究者が研究所に滞在されていますので、日常的に他国の研究者とコミュニケーションを取る機会も多く、他国の文化や異なる考え方などに触れることができ、多くの刺激やアイデアをもらうことができます。

このように、若手をはじめとして多くの研究者とのコミュニケーション機会が確保されていると言うことは、自身の研究活動のスケジュールやリズム構築にも役立ちます。とかくリズムが崩れやすい院生生活において、ある程度のペースメーカーを作ることができるという点は、研究面のみならずメンタルヘルスの面でも有益です。

第2に、国際シンポジウムでのポスター報告や学内の研究報告会（プロGRESSレポートなど）といった研究報告のチャンスが多いという点が、地域情報研究所の特徴であると考えています。特に国際シンポジウムでの研究報告は、英語での研究報告に不慣れな若手研究者にとって貴重な経験となります。積極的に英語での研究報告にチャレンジすることで国際学会等への心理的なハードルを下げると共に他国の研究者との関係性を構築し、国際的な研究展開の足掛かりを作ることができます。また、学内での研究報告は研究所所属の多くの先生方の前での研究報告となるので、普段の研究科などにおける研究報告以上に多様な観点から議論が可能となります。

このような報告は、国内外の学会やシンポジウムでも多く募集がなされているので、当然学会報告という形で行うことも可能ですし、その方が業績書に記載する研究業績としても良いものとなります。しかし、少なくとも私の場合、参加経験の少ない学会でいきなり

英語の報告などを申し込むことに二の足を踏んでしまう様な経験が多々ありました。また、自分の中で研究を十分に詰め切ることができていないと感じるような場合に、学会での報告を行うだけの価値のある研究内容となっているかどうかを疑問に感じ、報告を躊躇してしまうことも少なくありませんでした。報告に対してこのような不安や躊躇を感じた際に自身では一步踏み出すことができず、なかなか研究報告の機会を作ることができない院生も多いように思います。

地域情報研究所のシンポジウムなどにおける研究報告は、研究報告に対するこれらの不安や躊躇を解消するために非常に効果的なものでした。研究所がシンポジウムを主催しますので、所属する研究者は企画を盛り上げるためにもポスター報告などを強く奨励されます。国際シンポジウムとは言え所属している研究機関が主催するものですので、知っている先生の少ない国際学会などと比べれば報告への心理的なハードルが低く、周囲からも背中を押してもらえます(プレッシャーをかけられるとも言います)。そして、ここでの英語報告などの経験が、より大きな学会やよりアウェーな場での研究報告の下地となり、自分自身の背中を押す経験となります。つまり、地域情報研究所の主催するシンポジウムなどでの研究報告は、個別の研究業績や成果以上に自分自身の経験値を高め自信をつけていくプロセスとして重要であると感じています²。

第3に、OICのB棟4・5階には各研究機関が集積しており地域情報研究所もその1つであるため、他の研究機関に所属する研究者とのネットワークを広げやすいという特徴があります。私の場合、隣に研究室を構えている立命館アジア・日本研究所の企画に参加させていただくことが多く、同研究所の英語論文サポートプログラムでの英語論文執筆やAJIフロンティアセミナーにおける研究報告などに取り組むことができました。これらの企画への参加は、語学力をはじめとした自身の能力向上という点はもちろんのこと、より多くの研究者との関係性を構築できるという点も大きな利益となります。

研究者、特に年齢の近い若手研究者とのコネクションは、自身の研究に対する視野を広げるのみならず、自身のキャリアパスを考えるためにも非常に重要なものとなります。人文社会科学系の博士課程後期課程は、恐らく日本社会の中で最も将来像やキャリアパスが不明確な立場の一つです。そのため、身近にロールモデルとなりかつ相談に乗ってもらえるような若手研究者がいることが、自身の将来像を明確化させるために重要なポイントとなると感じています。若手研究者は立場が不安定でキャリアに対する不安が大きい場合が多いため、少しでも現実的なキャリアパスを描くことは実際のキャリア形成に加えて精神的な安定にも寄与し、結果として研究にも好影響を与えてくれます。

2.3. 地域情報研究所における「雑談」の重要性

ここまで、大学院生や若手研究者の研究活動及びキャリア形成上の諸課題を確認し、私の経験から地域情報研究所における研究活動がそれらの課題にどの程度対応可能かという点を整理してきました。しかし、地域情報研究所のような研究機関に所属することの最大

² もちろん、これらのシンポジウムが研究業績として無意味であるとか、自身の研究に対するフィードバックが乏しいであるとか、そういった否定的な意味は含んでいません。

のメリットについては、十分な言及ができていません。正確に言語化することがなかなか難しいかもしれませんが、私の感じたこの点についてなるべく皆さんに伝わるように整理していきたいと思います。

私にとって地域情報研究所に所属することの最大のメリットは、ある種の「雑談」の中にありました。私の所属した3年間、研究所を日常的な研究拠点とする研究者は、私と所長の森先生を含めて4~5名程度でした。毎日3人は集まる研究室では、だいたい昼過ぎと夕方に森先生の掛け声によってコーヒブレイクが挟まれることになります。その時間にはプライベートな話から研究に関する議論まで様々な事柄が話題に上りますが、この時間が私という研究者の基礎を養成する非常に大切な時間となっています。フォーマルな学会や研究会ではなく、半分プライベートな状態で直近のニュースに対する考えや読んだ本の感想、高名な学者・学説についての考えなど、様々なことを議論してきました。

もちろん学会などのフォーマルな形式での議論も重要ですが、そこで「マルクスの唯物史観についてどう考えるか」や「ネオ・リベラリズムについてどう考えるか」、「アイヒマンは本当に陳腐な役人なのか」といった話をする機会はほとんどありません。世界的に有名な学者であれば、学会でこのような議論を唐突に始めても聞いてもらえるかもしれませんが、私のような実証研究がせいぜいの若手研究者がこんな話をしても誰にも興味を持ってもらえないでしょう³。また、授業や研究会ではある程度テーマが確定している場合がほとんどで、終わりの見えない議論を長々とすることは意外と困難です。

こういったある種とりとめのないような議論は直接的に論文や研究の進展に役立つわけではありませんが、自身の社会に対する視座や研究者としての態度を考える貴重な時間です。近年ではGoogleなどの先駆的なIT企業のケースから、アイデアを生み出すためにリラックスして雑談することのできる空間の重要性が強調されています。学術研究においても雑談はまさに同様の機能を果たすものであり、地域情報研究所での雑談や多岐に渡る会話は新たなアイデアや考えを生み出すと共に自身の考えを固める機会となっているのです。

3. 地域情報研究所と大学院生・若手研究者

3.1. さらなる大学院生・若手研究者育成に向けて

最後に、地域情報研究所での大学院生や若手研究者の研究活動がより充実したものとなるように、いくつかの私見を述べたいと思います。まず、若手研究者、特に博士課程後期課程院生の積極的な受け入れを提案します。現在、地域情報研究所の研究員用デスクは9席存在しますが、利用されているのは3席のみです⁴。基本的に募集はインターネット上で行われており多くの大学院生に門戸が開かれています。ほとんどの大学院生は研究所の存在を十分に把握していないか、自身が所属してデスクを利用することができることを知りません。そのため、デスクの利用を希望し研究所を拠点とする大学院生が非常に稀なケースとなってしまっているのです。

³ 専門にしていない学説や議論に対して報告に値する議論ができるとも思いませんが…。

⁴ なお、海外・学外からの研究員受入などのために9席全てを一度に埋めることは難しいですが、常に5名程度の利用者が存在することが望ましいと考えています。

私を含め現在の利用者は、研究所に所属されている先生が指導教員であるなど比較的研究所の情報を得やすい立場にいます。そのため、自身がデスクの利用申請の対象者であることも理解していますし、研究所を研究拠点とすることに対する心理的ハードルも低いです。しかし、そうではない院生や若手研究者に対しては十分な情報が行き渡っておらず、多くが出願をためらうような状態となってしまう可能性があります。ホームページの更新などで現在所属していない大学院生や若手研究者などにも研究所の情報を正確に知ってもらい、多くの方がチャレンジしやすい環境を整えることが重要であると考えます。

また、大学院生の発表機会をより拡大することも重要であると考えています。今年度は新型コロナウイルス対応のためにプログレスレポートなどの研究報告会をあまり開催できておらず、研究者同士の交流も限られたものとなっています。しかし多くの若手研究者にとって学内での報告の機会は、自身の研究について先生方や他の研究者と議論を行い、助言をいただくために重要な機会です。今年度は開催できなかったプログレスレポートですが、次年度以降は定期的開催されればと思います。加えて、研究所にまだ所属していない大学院生などに報告をしてもらえば、若手研究者に対する研究所への心理的ハードルの低減にもつながると考えます。

3.2. おわりに

以上が地域情報研究所における私の研究活動及び研究所の諸機能の紹介となります。研究所での経験は、その全てが研究者としての土台作りに寄与すると言っても過言ではないと思っていますし、実際に私にとってはそのような場でした。研究活動の展開に悩む大学院生や若手研究者の皆さんには、地域情報研究所を拠点とした研究活動をオススメしたいと思います。

これを読んで（別に読んでいなくてもいいですが）地域情報研究所に興味を持ってくださった方は、以下の URL か QR コードからホームページにアクセスしてみてください。また、より詳しく研究所について知りたい方は、メールアドレスから事務局にお問い合わせください。ぜひ地域情報研究所を活用して、充実した研究活動を行ってください！

地域情報研究所 ホームページ

<http://www.ritsumei.ac.jp/research/rdiri/>



メールアドレス : rdiri@st.ritsumei.ac.jp